

幼少期における都心との関わりと 思い出に関する研究

吉城 秀治¹・辰巳 浩²・堤 香代子³・西坂 従道⁴

¹正会員 福岡大学助教 工学部社会デザイン工学科 (〒814-0180 福岡市城南区七隈8-19-1)

E-mail: syoshiki@fukuoka-u.ac.jp

²正会員 福岡大学教授 工学部社会デザイン工学科 (〒814-0180 福岡市城南区七隈8-19-1)

E-mail: tatsumi@fukuoka-u.ac.jp

³正会員 福岡大学助教 工学部社会デザイン工学科 (〒814-0180 福岡市城南区七隈8-19-1)

E-mail: kayoko@fukuoka-u.ac.jp

³阿久根市役所 (〒899-1696 鹿児島県阿久根市鶴見町200)

幼少期の経験や体験は、その後の生き方に影響を及ぼしてることが様々な分野において示されている。幼少期における都心での経験や体験を捉え、現在の都心への指向性との関係を明らかにしていくことで、将来にわたって都心に人々を惹きつけ続けるための知見が得られるものと考えられる。

本研究は、福岡市民を対象にアンケート調査を実施し、テキストマイニング手法により都心での幼少期の思い出について分析した。その結果、幼少期における都心の思い出には食事をしたこと等をはじめとして、多様な思い出があげられていた。また、これらの思い出は、現在の都心指向の意識に関係してくることが示されている。

Key Words : *memory of a childhood, city centre, text mining*

1. はじめに

モータリゼーションの進展に伴う大型ショッピングセンターの郊外立地により、多くの都市において都心部の衰退が問題となっている。また、人口減少社会に突入したことも相まって都心部の人通りが減少傾向にある都市も数多く見られ、人々を都心に惹きつけるための対策が必要とされている。

そこで、これまでも都心における住民や来街者のニーズ等が把握されており、学術的な検討も進められている。しかしながら、これらの中では大人の活動やニーズを中心とした議論が多く見られる一方で、そこに「子供」の視点が含まれているものは少ない。

幼少期の経験や体験は、その後の生き方に影響を及ぼしてることが既に様々な分野において示されている。すなわち、本分野においても、幼少期における都心での経験や体験を捉え、現在の都心への指向性との関係を明らかにしていくことで、将来にわたって都心に人々を惹きつけ続けるための知見が得られるものと考えられる。

そこで本研究では、人々の幼少期における都心の思い出

を把握するとともに、現在の都心への指向性との関係性を明らかにすることを目的とする。

なお、本研究における幼少期とは小学校を卒業するまでとし、都心とは例えば福岡市なら天神や博多のような一般に商業の発達した場所と定義する。後述するアンケート調査においてもその旨を記載している。

2. 調査概要

本研究では、福岡市民を対象に人々の幼少期における都心の思い出を調査した。アンケートの調査の概要を表-1に示す。アンケート調査は2013年9月末に、福岡市内の戸建てや集合住宅にポストイング形式で無作為に配布し、後日、郵送回収している。配布部数は5,000部であり、福岡市の7区に人口比に応じた部数を各区でポストイングをした。なお、回収部数は606部で回収率は12.1%である。主な調査項目は、幼少期に都心へ行った経験や都心でよく行った場所、都心で楽しかった思い出等である。また、都心のイメージを17個の形容詞対ごとに5段

階で評価するSD法の設問も設けている。

3. 年齢層別の都心との関わりの実態

(1) 幼少期における都心への来街について

まず本節では、幼少期における都心との関わりの実態について明らかにする。最初に、年齢層別に幼少期に都心へ行った経験について尋ねた結果を図-1に示す。図より、どの年齢層も都心への来街経験は高くなっており、特に40歳代の来街経験が約93%となっている。以下では、この来街経験のあるサンプルを対象に集計を進める。

次いで、年齢層別に幼少期の都心への来街手段について尋ねた結果を図-2に示す。年齢層が上がるに従い自動車の割合は減少し、65歳以上では自動車利用が見られないうが、JRや私鉄の鉄道の割合は増加している。

そして、幼少期によく行っていた場所について尋ねた結果を図-3に示す。本設問については自由記述形式で尋

ねており、記述内容を10分類に整理した上で年齢層別に示している。全体ではデパートの館内や屋上が約48%、デパート内のレストランや食料売場が約15%とデパートが行き先として多く回答されている。一方で、その中でも10-20歳代ではデパートの館内の割合が減少しており、その反面、映画館や文化施設の割合が高くなってい

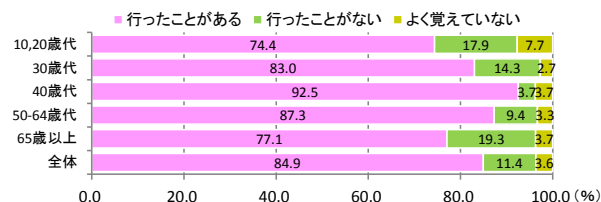


図-1 年齢層別都心へ行った経験の有無

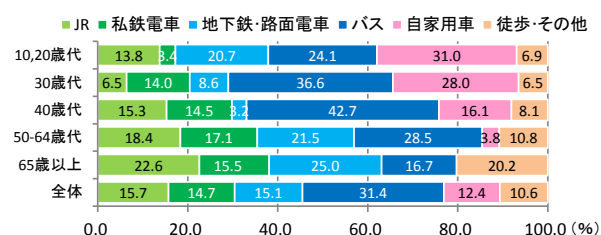


図-2 年齢層別交通手段

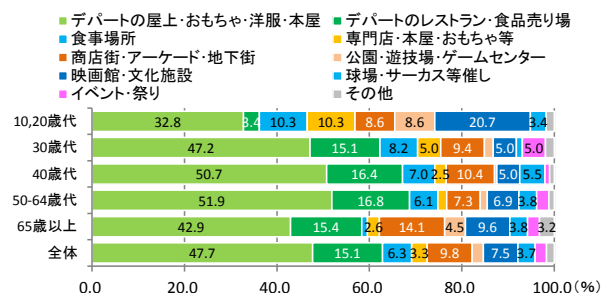


図-3 幼少期によく行っていた場所

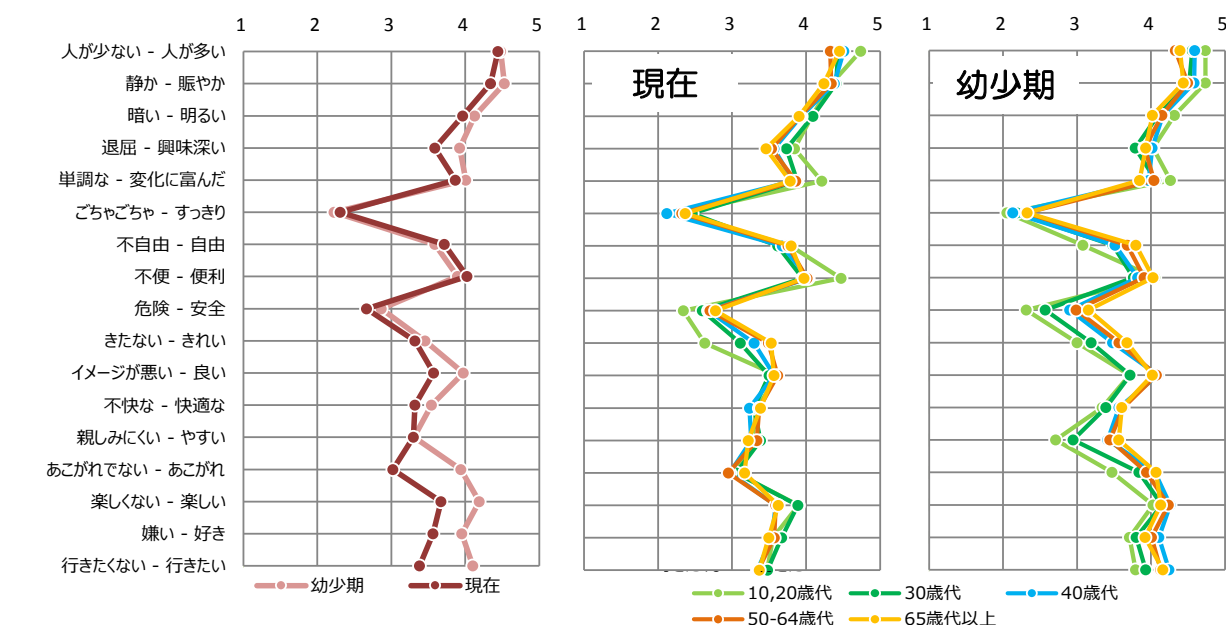


図-4 現在と幼少期の都心のイメージのプロフィール曲線

るなど、年齢層の違いが見られている。

(2) 幼少期と現在の都心のイメージについて

次いで本節では、都心に対する幼少期と現在の意識の関係を明らかにする。まず、被験者に幼少期と現在の都心のイメージを17個の形容詞対ごとに5段階で評価していただき、その平均値を年齢層別に算出した。その結果を図4に示す。図4左のプロフィール図より、現在より幼少期の方が評価が高く、特にあこがれや楽しい、行きたい等の形容詞対ではその傾向が特に強い。一方で、人が多いや、賑やか、明るい等の都心の環境に対するイメージは幼少期と現在の評価にほとんど差はみられない。

現在と幼少期の年齢層別のプロフィール曲線では、現在の評価では若干の差がみられるが、年齢層別に大きな差はみられない。しかし、幼年期の評価では年齢層の違いによる差がみられ、若い年齢層ほど評価点が低い傾向がみられる。その他の属性で幼少期と現在の印象を比較したが年齢層別が最も特性が表れており、これは年齢層によって幼少期の都心の姿は大きく異なっており、それが回答に反映されている結果と考えられる。

次いで、現在と幼少期の都心のイメージの関係を明らかにするために、現在と幼少期の2時点の評価を基に、図5に示すような相関図を作成し、回帰曲線を求めた。図では、その内の3個の形容詞対（あこがれ、好み、行きたさ）を示している。また、グラフ内の数値は人数を表している。図より、回帰曲線の傾きは正となっていることがわかるが、同様に図5で示した形容詞対以外についても回帰直線を求めると、全ての形容詞対で直線の傾きが正となっていた。この結果は、幼少期の評価と現在の評価には正の相関関係があることを示したものであり、都心に対する幼少期と現在の意識の関連を示唆したものと考えられる。

4. 現在の都心指向と幼少期の思い出との関係

前章の分析の結果、都心に対する幼少期と現在の意識の関連が示唆されている。そこで本章では、幼少期において、都心で楽しかったことや心に残っている思い出に関する自由記述内容について分析した上で、現在の都心指向との関係について明らかにする。

なお、以下の分析では、現在の都心指向を表す指標として、現在の都心のイメージの「行きたさ」を用いることとした。そして、幼少期の思い出に関する自由記述並びに「行きたさ」の両設問について回答している286サンプルを分析対象としている。

(1) 都心における幼少期の思い出

まず、都心における幼少期の思い出について理解するために、KH Coder²⁾による自由記述の解析を行った。KH Coderによる形態素解析を行い、幼少期の思い出に関する頻出語を抽出した。出現回数の高かった上位50語を表2に示す。表より、「食べる」や「食堂」、「お子様ランチ」等の出現回数が多くなっており、幼少期の食事は思い出として強く残っていることがわかる。

そして、幼少期の思い出を定量的に分析していくために、これら頻出語同士の繋がりをJaccard係数に基づいて整理した。Jaccard係数は0から1までの値をとり、関連が強いほど1に近づくが、本研究では、他の研究を参考としてJaccard係数が0.10以上のもののみを扱うこととした。その共起ネットワーク図を図6に示す。なお、図中のバブルの大きさは出現回数に比例しており、色分けは比較的強くお互いに結びついている部分を検出してグループ分けを行うサブグラフ検出によるものである。この色分け並びに線の繋がりをもとに幼少期の思い出を見てみると、デパートの食堂でお子様ランチを食べ、デパートの屋上の遊園地で遊んだ思い出や、おもちゃや洋服を買ってもらった思い出、路面電車や乗り物に乗って楽しかつ

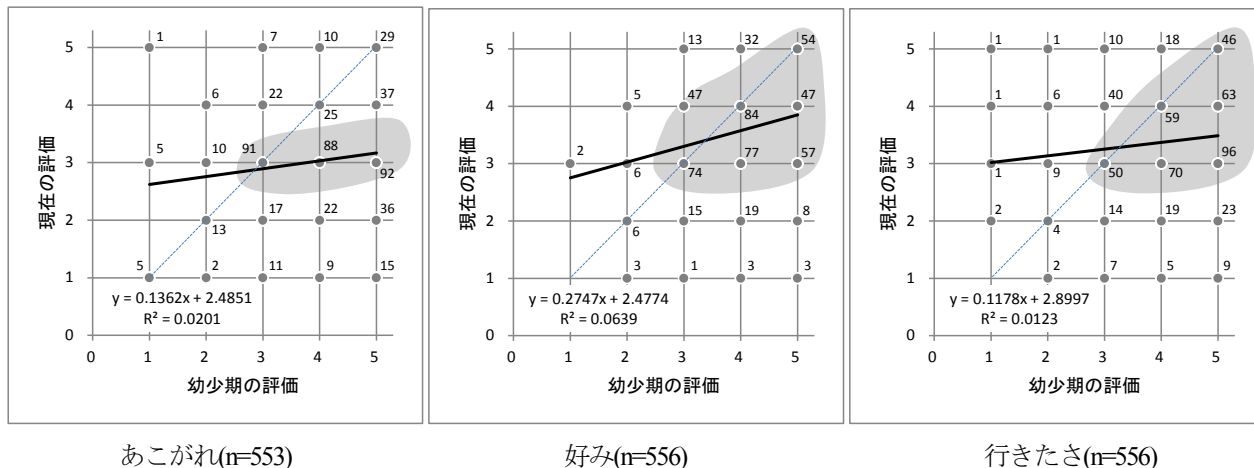


図-5 現在と幼少期の評価の関連性

表-2 幼少期の思い出に関する自由記述の頻出上位50語

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
食べる	135	どんたく	12
屋上	105	玉屋	12
デパート	88	多い	12
買う	73	新天町	11
遊ぶ	68	ランチ	10
食堂	65	スケート	9
見る	54	家族	9
岩田屋	52	外食	9
行く	46	好き	9
お子様ランチ	41	山笠	9
遊園地	41	天神	9
洋服	38	動物	9
おもちゃ	27	うどん	8
レストラン	27	ゲーム	8
乗る	21	初めて	8
映画	20	地下	8
楽しい	19	電車	8
乗り物	18	お菓子	7
当時	18	ご飯	7
買い物	16	ペットショップ	7
遊具	16	映画館	7
楽しむ	14	大丸	7
アイス	13	母	7
今	13	友達	7
売り場	13	路面電車	7

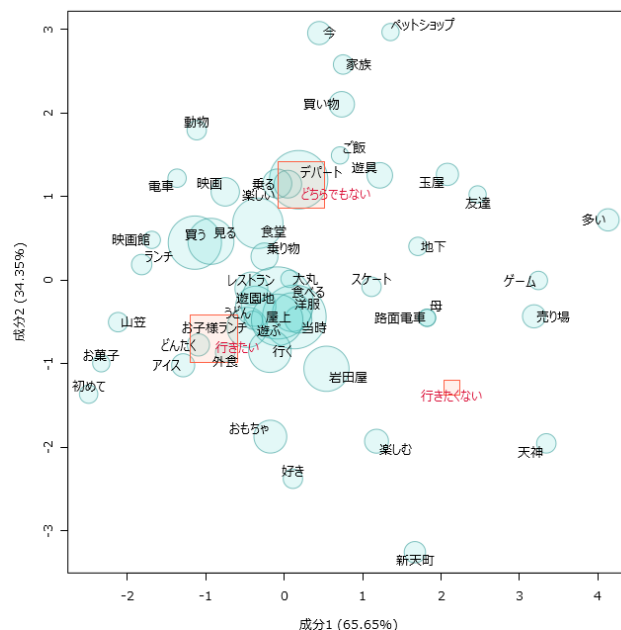


図-7 幼少期の思い出と現在の都心指向の関係

に示す。なお図中では、上位50語の中でも出現回数が多いほど大きな円で示され、「行きたさ」については回答割合が高いほど大きな正方形で表現される。

コレスポンデンス分析では、各カテゴリの位置は類似しているカテゴリが近いところに配置されるが、図より、「行きたい」や、「どちらでもない」の周辺には抽出語が多く集まっている一方で、「行きたくない」の周辺に語は配置されていない。これは、幼少期における多様な経験や体験は少なくとも現在の都心指向の意識に悪影響を及ぼすものではないことを示したものである。

5. おわりに

本研究では、幼少期における都心の思い出に着目し、思い出についてテキストマイニングにより定量的に分析を進めるとともに、現在の都心指向との関連について検討してきた。今後は、幼少期における都心との関わりについて詳細に把握するとともに、年代別に思い出に関するテキスト構造の違いを明らかにしていきたいと考えている。

参考文献

- 1) 例えば、独立行政法人 国立青少年教育振興機構：「子どもの体験活動の実態に関する調査研究」報告書、2010。
- 2) KH Coder, <http://khc.sourceforge.net/>, 2014.7.30 最終閲覧

(?????.?? 受付)

図-6 幼少期の思い出に関する共起ネットワーク

たことに関する思い出、地下売り場でのアイスやお菓子に関する思い出等に整理できるなどの頻出語同士の関係が示されている。

(2) 幼少期の思い出と現在の都心指向の関係

最後に本節では、幼少期の思い出と現在の都心指向の関係性を明らかにする。幼少期の思い出としては表-2に示している上位50語を用いた。また、現在の都心指向としてはサンプル数の都合上「行きたさ」について5段階で尋ねた評価を、行きたい、どちらでもない、行きたくないの3段階に集約したものを用いている。これらのデータを基に、コレスポンデンス分析を行った結果を図-7